

(2) 「心をつなぐ活動」で、児童が進んでコミュニケーションを図ろうとするための手立て

外国語活動の目標の三つの柱を見ると、三つとも「外国語を通じて」行うことを明記しています。外国語活動では、「外国語を通じて」という特有の方法によって、目標の実現を図ろうとしているといえます。

目標における三つの柱

- ① 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る
- ③ 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる

コミュニケーション能力の素地を養う

「心をつなぐ活動」で、児童が進んで外国語を通じてコミュニケーションを図ろうとするためには、外国語に十分慣れ親しませていく必要があります。積極的にコミュニケーションを図ろうとするときに外国語活動では「外国語を通じて」という特有の方法を使うので、外国語へ慣れ親しむ過程がとても重要になります。外国語に慣れ親しむ過程を充実させ、それに加え、外国語活動で「目指す姿」を共有し価値付けていくことで、人とかかわることの楽しさを体験させていきます。

そこで、「心をつなぐ活動」で、児童が進んでコミュニケーションを図ろうとするためのポイントを以下のように考えました。

ア 外国語に慣れ親しませること**イ 「目指す姿」を共有し、価値付けていくこと**

また、前述したように、「心をつなぐ活動」は、単元終末のインタビュー活動だけではなく、あいさつひとつにしても、「心をつなぐ活動」と捉えるので、慣れ親しむ過程も含め、単元全体で「目指す姿」を共有し、価値付けていく手立てを取っていきます。

ア 外国語に慣れ親しませること

外国語に慣れ親しませるために、三つの手立てを考えました。

3つの段階の『きく』活動を仕組む
単元のゴールを明確にする
他教科や既習事項等と関連させる

3つの段階の『きく』活動を仕組む

金森強は、「きく」にもいろいろな「きく」があり、「異なる『きく』を『聞く』→『聴く』→『訊く』の3つの段階に分けて考え、それぞれの活動を準備することが大切」⁽¹⁾であると述べています。そこで、次のように考え、単元の中で位置付けて、段階を踏みながら児童が活動していくことを想定しました。

- ・「聞く(hear)」 ……音や声を耳で感じ取り、大まかな情報を得ること。
- ・「聴く(listen)」 ……注意深く話に耳を傾け、内容を理解しようとする。
- ・「訊く(ask)」 ……相手に尋ねて、答えを聞こうとすること。相手のことを思い、予想しながら考え、自分の考えや気持ちとも比べながら尋ねること。

最後の「訊く」段階では、これまで相手とかかわってきた体験を想起しながら相手の考えていることを予想して尋ね、自分の考えと比較して自分の考えを伝えたり、相手の考えを受け止めたりする「心をつなぐ活動」につなげていきます(図1)。

(1) 引用文献 金森 強『小学校外国語活動 成功させる55の秘訣』 2011年 p.192

単元のゴールを明確にする

児童にとっての「単元のゴール」とは、身近な人とのコミュニケーションを楽しむ活動によって得た新しい情報を使って、製作物を作成することとしました。単元のゴールを単元の最初に明確にしておくことで、児童の関心・意欲に高まりがみられるようになると考えました。単元のゴールに設定する、身近な人とのコミュニケーション活動を楽しみにしているからこそ、ゴールに向かって児童は英語表現に慣れ親しむ活動に積極的に取り組もうとします。ゴールを設定するときは、児童自らが考えるよう導いていくと、自分たちで決めたゴールに自分たちで向かう感覚が生まれると考えます。これは、1時間の授業時間の中でもいえることです。できるだけ児童自身に目標を考えさせることで、積極的に活動に取り組もうとする環境を整えていくことができると考えます（資料1）。

時	児童の活動	主な評価
1	英語表現を知る 単元のゴール設定 聞く(hear) 英語と日本語の音の違いに気付く 聴く(listen)	言語や文化に関する気付き 外国語への慣れ親しみ
2	聞いて慣れる 聞いて反応する 言って慣れる 繰り返す 他教科や既習事項と関連させる	
3	擬似的コミュニケーション活動や 身近な人とのコミュニケーション活動	コミュニケーション活動
4	身近な人とのコミュニケーション活動 訊く(ask) 単元のゴール	

資料1 外国語に慣れ親しませていく単元構成の例

他教科や既習事項等と関連させる

英語表現に出会うときや聞いて反応する活動をしていくときに、児童は「前に学習したことを言っているのだろう」と推測することができれば、これまでに学習したことを想起しながら、より注意深く話に耳を傾けるきっかけがつかめると考えます。自分が体験したことや学習したことが、話の内容を理解するヒントになります。児童の日常生活や学校生活を中心にした話題が入れば、英語表現を聴いて話の内容を理解しやすくなります。既習事項等は、現在の学年で学習したことだけではなく、下学年で学習したことの方が、内容が易しく理解しやすいと考えます。これまでに体験したことや学習したことを把握していると、活動内容を考えるときに工夫することができます。

イ 「目指す姿」を共有し、価値付けていくこと

国立教育政策研究所教育課程研究センター著作の「外国語活動における評価方法等の工夫改善のための参考資料(平成 23 年 11 月)」に、評価における考え方が次のように示されています(資料 2)。

観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
趣旨	コミュニケーションに関心を持ち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。	外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることなどに気付いている。
留意すること	児童がコミュニケーション活動を行う中で、相手意識をもってコミュニケーションを図っている構想を捉えるようにすることが大切である。	単元に設定されている様々な活動の中で、その単元で使用するよう設定されている外国語を聞いたり話したりしている児童の行動を捉えるようにすることが大切である。	外国語と日本語との比較などを通して発見した言語の共通性や相違性から言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方等に気付いている様子を捉えるようにすることが大切である。

資料 2 外国語活動の評価の観点及びその趣旨と留意点

外国語活動における「目指す姿」とは、どのような姿でしょうか。「目指す姿」を明確にし、教師と児童が共有していくことで、外国語活動の目標に迫っていくことができます。資料 2 の観点や趣旨に沿って、授業の中で児童の具体的な姿「目指す姿」を設定して児童にも示し、共有していくことが大切です。資料 2 を基に考えられる、評価の観点別の「目指す姿」の具体例を以下に示します。

コミュニケーションへの関心・意欲・態度

- ・相手の方を見て一生懸命に話を聞いている。(うなずく、向き合う、顔を見て)
- ・相手の言うことを聞いて反応している。(ほめる、受け止める、質問する)
- ・自分のことを一生懸命伝えようとしている。(ジェスチャー、表情)
- ・進んで友達や ALT とかかわって楽しく活動している。
- ・あいさつやお礼が相手の方を向いて言える。(コミュニケーションのマナー)

外国語への慣れ親しみ

- ・歌やチャンツを楽しく聞いたり、口ずさんだりしている。
- ・話を聞いて、大体の内容を理解して反応している。
- ・外国語を聞いて答えたり、音声を聞いて真似をしたりしている。
- ・外国語を使ってあいさつをしたり、聞いた表現を言ったりしている。
- ・外国語を使って自分の考えや思いを伝え合っている。

言語や文化に関する気付き

- ・日本語と英語の違い(発音やイントネーション)に気付いている。
- ・世界には様々な言語や文化があることに気付いている。
- ・自文化や異文化の違いや共通点に気付いている。
- ・相手の良さに気付いたり、新たな発見をしたりしている。

資料 3 評価の観点別の「目指す姿」の具体例

一方で、以下に示したような言葉掛け（NGワード）をすると、児童の意識はどのようになるでしょう。早くカードを取った人が勝ちということになれば、児童は注意深く英語表現を聞かなくなります。また、英語を早く覚えた児童ばかりほめると、「英語の塾などに行っている人が活躍する」と思い、苦手意識が出てくるだろうと思われます。問い掛けを注意深く聞き、知っている英語表現を言いながら、たとえ間違っているとしても積極的に反応する態度をほめたいものです。聞いて反応する態度を育てながら、自然と慣れ親しませていきたいと考えます。

NGワード

- ・（ゲーム等で）早くできた人、勝った人はすごいね。
→勝負をすることが目標ではない。たくさん英語表現を言っていた人をほめる。
- ・よく英語を覚えたね。
→慣れ親しみが目標。覚えることを要求されていると児童は感じる。

このような「目指す姿」を共有し、価値付けていくために、3つの手立てを考えました。

**安心して外国語活動に取り組ませるために、単元前に「目指す姿」を明確にする
相手に丁寧にわかっている姿こそ「目指す姿」だと気付かせていく
「目指す姿」が児童にも分かるように共有する**

安心して外国語活動に取り組ませるために、単元前に「目指す姿」を明確にする

児童にP1に挙げたような「あまり外国語をしゃべれないから、伝えるときに間違ったら恥ずかしい。」などの意識があることから、外国語活動を始める前に安心感をもたせる必要を感じました。単元に入る前に、外国語活動の目標を教師と児童が共有し、「目指す姿」に気付かせていくことで、どの児童にも「自分にもできるんだ」という安心感をもたせることを目指します。児童は、単元に入る前に安心感をもち、それから人とかかわることのよさを実感する体験を積み重ねていきます。そうすることで、児童はコミュニケーションを図ることに価値を見だし、心をつないで人とかかわることの良さを感じていくことができると共に、外国語活動に対しての不安感が「楽しい」という意識に変わっていくと考えます。

相手に丁寧にわかっている姿こそ「目指す姿」だと気付かせていく

どの教科でも話す聞く活動はありますが、外国語活動では改めて意識して、相手に丁寧に接しながらコミュニケーション活動をさせていくことを目指しました。相手と向き合い、相手が言いたいことを予想しながら聴こうとする態度は、話し手に、「自分のことをきちんと聴いてもらってうれしい」という、心がつながる心地良い体験を実感させることになると考えます。ゲームで速さを競ったり、インタビュー活動でかかわった人の数を競ったりすると、じっくり人とかかわり、良さを実感するというめあてからずれてきます。教師は、「目指す姿」を見つけて価値付け、児童と共有していくことが大切です。

「目指す姿」が児童にも分かるように共有する

児童自身が、「どんな姿を目指すのか」ということを意識して活動することは、とても大切なことです。教師は、評価規準をしっかりとって、1時間の授業の中で、「目指す姿」にかなった児童を見付けてほめるということを繰り返し行う必要があります。そうすることで、全体にも「目指す姿」が浸透していきます。教師は、評価の観点に沿った児童の姿を捉えて、学級全体に具体的に紹介します。その積み重ねで、児童は自分の行動を振り返り、より「目指す姿」に迫る行動を目指して活動しようとするようになると思います。

積極的にコミュニケーションを図ろうとしている姿、心と心をつなぎながら人とかかわる姿をほめることを積み重ねていくことで、教師と児童が「目指す姿」を共通認識していきます。そうすることで、目標と指導と評価の一体化を図ることができると考えます。